

世界でいちばん美しい景色のななし

ひとつの花に話しかけるだけで、
世界中の花に話しかけたことになる。

- 1 僕が生まれた日
- 2 占い師のおじさん
- 3 忘れてしまったこと
- 4 はじめての旅
- 5 砂漠へ
- 6 砂漠のはての花
- 7 息子が生まれた日
- 8 世界でいちばん美しい景色

ある本に、「写真家は、ほんとうに美しい景色を見たとき、写真をとらない」という一節がありました。もちろん、すべての写真家がそうだとはかぎらないでしょうが、ただ、写真家ではない僕も、なぜだか、この言葉の意味がよくわかりました。

というのも、僕がほんとうに美しい景色とでくわしたあのとき、そもそもカメラを持っていなかったのですが、たぶん持っていたとしても、シャッターをきらなかつたと思うからです。世界を包みこむような景色を前にして、頭がカラッポになっていたはずが、ふと浮かんできたのは、母と父にかわるがわる抱きかえられていた幼い頃のしあせな記憶で、こんな美しい景色が存在する理由と、僕自身が存在する理由が、同じもののような気がしたからです。

つまり、僕はこの世界に、永遠に記録されている存在だと、わかったのです。

「おまえは、生まれる前から不思議な子だった」

と、僕のお父さんはよく言っていました。

つめたい風が吹き荒れていた、冬の夜のことです。

お母さんが眠ったまま、ウーウーと、うなっていました。お父さんが身体をさすって名前を呼んでも、ぐったり横になっているだけで返事がありません。やがて、眠ったままのお母さんが、

「アタマ、いたいのに…」

と、言いだしました。

「どうした、大丈夫か？」

お父さんがつよく身体をゆすつても、お母さんは目を閉じているだけです。それでもまだ、

「いたいよ、オトーサン」

と、うなっていたのですが、そのときお父さんは、あれっ、と思ったのです。というのも、お父さんが「お父さん」と呼ばれたのは、はじめてだったからです。

「ここか、ここにいるのか？」

お母さんのお腹をさすると、また声がしました。

「ボク、あたまいたいの。ひとりでさみしいし」

このとき、お父さんは、ピカッと、ひらめいたそうです。いま、しゃべっているのは、お母さんではなく、お腹の中の赤ん坊ではないか、と。

「…生まれくるのかい？」

お父さんは、小さな子どもに接するように話しかけていました。

「ボク・・・、うまれてきて、いいの？」

「もちろんだよ」

「どうして？」

「どうしてって、君のお父さんとお母さんが、待ってるから」

「・・・ウン」

その10日後、僕は生まれてきました。

僕は、自分が生まれてきた、その日のことを、よく覚えています。

ちょうど、僕がお腹から出てきたとき、
海辺に座っていた男の子の前で、
イルカがジャンプしました。

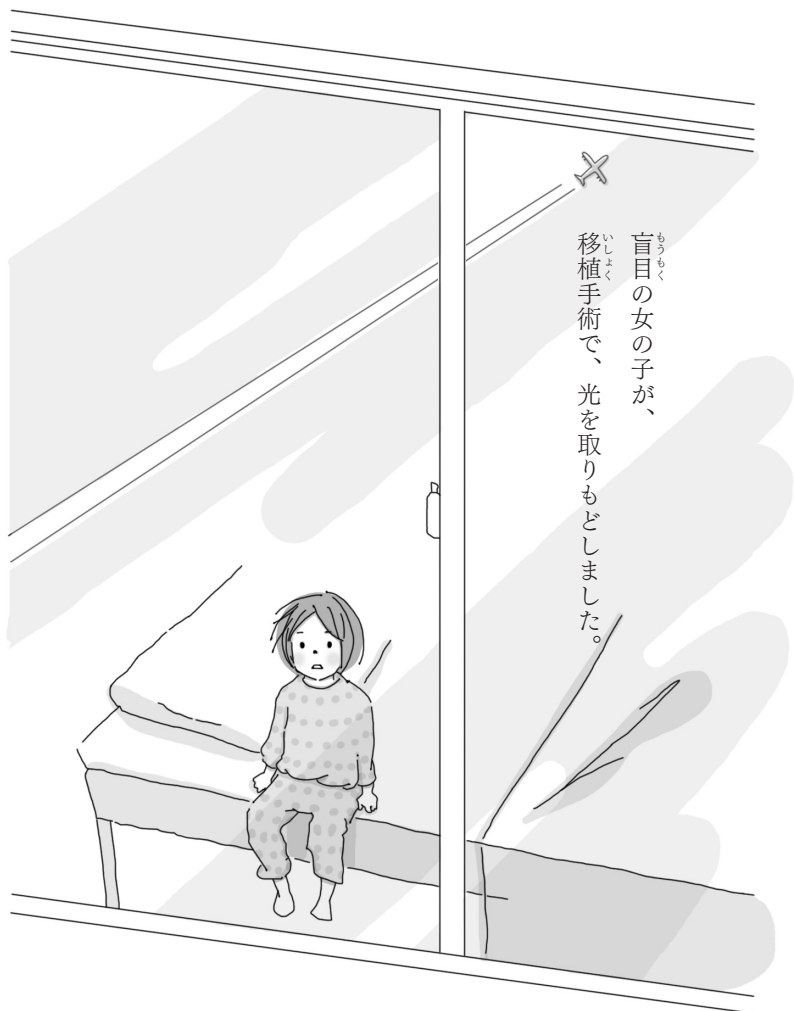


サラリーマンが、
虹を追いかけて
駆け出しました。



ある殺人犯が、
牢獄の中で聖書を読みきりました。





もうもうく
盲目の女の子が、
いしょく
移植手術で、光を取りもどしました。

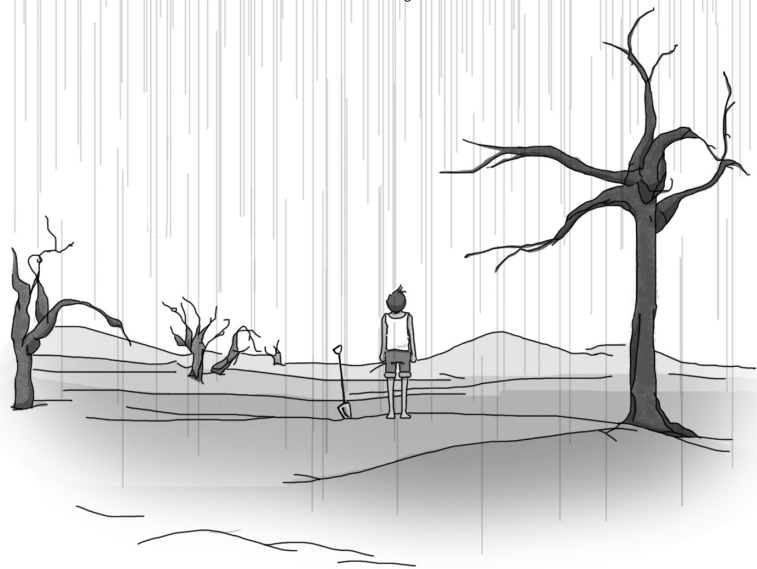


ばくげき
爆撃を命令した大統領が、
だいとうりょう
その命令を取り消しました。

旅の女性が、砂漠に花を植えました。



干ばつの村で、雨が降りだしました。



ある大金持ちが全財産を投じて
遊園地をつくり始めました。



『世界でいちばん美しい景色のはなし』

全国の有名書店でご注文いただけます。
ホノカ社オンラインショップでも発売中！

URL <http://u-keshiki.net>

